
世界一美味しいラーメンをあなたに（仮）

犀川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界一美味しいラーメンをあなたに（仮）

【Nコード】

N8364X

【作者名】

犀川

【あらすじ】

ロンドンから帰国したコナンは、その後も様々な事件に巻き込まれては、小五郎を身代わりに解決する日々が続いていた。そんなある秋の休日、コナンは自宅で休む哀を呼び出して……

この話は名探偵コナン73巻前後のネタバレを含みます。ご注意ください。

起き抜けの一杯は至福のひととき（前書き）

ご無沙汰しております、犀川です。

今回はLIVEDさんの言葉で閃いた4話完結の短い話を連載します。

相変わらずの遅筆ですが、お付き合い頂けたら幸いです。

起き抜けの一杯は至福のひととき

コポコポと音を立てながら、上部の漏斗部分へ熱水が吸い上げられていく。

ふわりと立ち昇る湯気を目で追えば、この家の天井の高さに気が付くだろう。

窓辺から、柔らかい日差しが溶け込む広いリビング。

その中央に弧を描くようにして設けられたキッチンカウンターに、栗色の髪少女が座っている。

今夏、小学１年生になった少女・灰原哀は、レトロなサイフォン式コーヒーマーカーを前に頬杖をつきながら、フラスコ内の熱水が全て上部の珈琲粉と混合されるのを見つめていた。

周囲に広がる挽き立ての豆の香りを肺いっぱい吸い込めば、沈んだ気持ち少しずつ高揚していくのが分かる。

哀は無意識のうちに目を細めた。

休日の朝は、登頂途中の陽の光を浴びながら、煎れたてのモーニングコーヒーを片手に最新の医学情報誌に目を通すのが密かな楽しみである。いつもはこの時間を、家主である阿笠博士と共に過ごしているのだが、彼は今朝早く、普段から懇意にしている少年探偵団と山菜取りに出かけたので不在だ。何でも『パソ通』時代からの博士の知人がその道に精通しているとかで、行き先を尋ねたところ、知人の案内で山梨県との境目にある山中へ向かうとのことだった。

居残った哀自身も名目上は少年探偵団の一員なのだが、体調不良と口実を作って彼らの誘いを断っていた。

セントラルヒーティングが施工されたこの屋内においては、外の凜とした空気を体感することはできないが、庭に移植された木々の

葉が紅葉していくのを眺めれば、外に出ずとも季節の遷移を感じることはできる。

わざわざ時間を労して山奥へ秋を体感しに行く必要は無いというのが、彼女の持論だった。

サイフォンの漏斗部分が吸い上げる熱水が無くなったところで、哀はカウンターのツールスタンドからスプーンを手を取った。そして溶液濃度が均一になるようにゆっくりと攪拌する。

……焦っては駄目、渋味や苦味は私の理想とするコーヒーの天敵なのだから。

アルコールランプの火を消し、漏斗部分に溜まった抽出液が再びフラスコ部分へ全て落ちるのを確認すると、哀は先に用意したコーヒーカップに黒色の液体を注ぎ入れた。

カップから昇る湯気に顔を近づけ、カップの端に口をつける。ドリップ式とは明らかに異なる濃厚な香りが、鼻腔全体に広がっていく。

「……これだから、サイフォン式は止められないのよね」

思わず鼻歌が出そうになるのを堪え、哀はコーヒーカップを片手にキッチンを降りた。

軽い足取りでリビングテーブルへ向かうと、正面のソファに腰を下ろす。

コーヒーカップをテーブルに置くと、隣に置かれた医学専門誌に手を伸ばした。読みかけていたページの内容を思い出しながら、貼られた付箋部分に指を挟む。

その瞬間、玄関のインターホンが鳴ったので、哀は伸ばした手を引いた。

玄関モニターに視線を向けると、黒い影のようなものが画面の端に見え隠れしている。

カメラの死角にでも立っているのだろうか。
応答しようとして、哀は顎に手を当てた。

今日は博士も少年探偵団も、彼も山菜採りでここには居ない。
親しい人間の大半が居ない状況で、ここを訪ねる人物は限られてくる。

途端、哀の思考が現実へと引き戻された。
俯けば、全身に緊張が走る。

「まさか」

繰り返し鳴る呼鈴に身動きが取れずに固まっていると、不意に呼鈴が鳴り止んだ。

哀の両肩が大きく震える。すると、咳払いに続いて、

「おい灰原、家に居るんだろ……？」

スピーカーから少年のくぐもった声が聞こえてきた。

哀ははっとして顔を上げると、

「江戸川君……！？」

上ずった声で、咄嗟に少年の名を呼んだ。

起き抜けの一杯は至福のひととき（後書き）

実は元々、原作で哀が退場した後の行動とのリクエストだったのですが、書き始めると想像以上に難しく（苦笑）原作は新蘭一直線だったので、哀の線が消えた今、コナンと哀の関係はどうなっているのかという点に注目して話を書くことにしました。ご期待に添えなかった場合は容赦なくご批判下さい orz

i n v i t u m

「よ、」

扉を開けると、ひんやりとした外の空気と共に少年の声が頬を掠めた。

玄関前に立っていた江戸川コナンは、眼鏡のレンズ越しに哀の顔を覗きみると、両手をズボンの尻ポケットに入れながら白い歯を覗かせた。哀は呆れたような、気の抜けた顔を見ると、コナンを内へ招き入れて扉を閉める。

「疲れるわね」

開口一番、正直な感想がついて出た。

「貴方、今日は子供達と一緒に博士と山菜狩りに出かける予定だったんじゃないの？」

哀の問い掛けにコナンは、ああ、と気のない声を出すと、
「このところ“オツチャン”が事件続きだっただろ。体調不良でパスしたんだよ。夕方に山菜狩りから戻ってきたら、博士の家に顔を出すって伝えてな。オメエもどうせ、いつもの『私はパス』とか言っただ断ったんだろ」

「季節の変わり目で気分が優れないからって、博士に言ったのよ」

コナンの推測を訂正するように強めの口調で哀が答える。

「私に何の用事があるかは知らないけれど、いつまでも玄関で立ち話をするのもなんだから、上がってコーヒーでも飲む？」

「あのさ」

「……オメエが良ければの話だけど、これから俺と出かけねえか？」

「……はあ？」

「あ、いや、だから……俺と昼飯、食べに行こうぜ」

思いも寄らないコナンの誘いに、哀は無言で顎に手を当てて何かを
考えこむと、コナンに近づき、額に手を当てた。

「……熱は無いわね」

「……本っ当に可愛くねーな」

「困ったわね。バカにつける薬が無いわ」

「行きたくねえなら……ハッキリそう言えよ」

コナンが眉間に皺を寄せる。それで哀の表情が変わると、コナンは
急に咳き込んで、

「ここからは少し歩くが、杯戸町へ行く途中に美味しい店があるんだ。
店長と顔なじみだから、小学生が入っても問題ない。オメエも

」

長々と話し始めた隙に、哀はコナンの額から手を離すと、回れ右で
玄関を上がり、リビングの奥にある自室へ歩いていく。気付いたコ
ナンが慌てて待ったと声を上げると、哀は振り向かないまま、

「準備してくるから、少し待っててくれる？」

返答に一瞬詰まったコナンだったが、哀の言葉を理解するとすぐに、
「早く来いよ」

哀は口角を僅かにつり上げると、そのまま自室の中へと入っていっ
た。

買ったばかりのブリーツキュロットに着替えるか迷ったものの、
結局それまで着ていた黒のハイネックとジーンズにジャンパーを羽
織って、部屋を出た。それから二人で外へ出ると、哀はコナンに案
内されるがままに杯戸町までの道のりを歩き始めた。

「それで、蘭のヤツ急に怒り始めて……」

隣を歩くコナンはと言うと、先程哀が「毛利さんとは上手くいってるの？」という質問をしてからずっと、最近の彼女と自身との関係について語り続けている。自ら振った話題とはいえ、惚気にしか聞こえないコナンの言葉に、哀は辟易とした気持ちを押し殺す。

深呼吸するように溜息を吐けば、視界が白く霞んだ。

今朝は今季でも最低気温をマークしただけあって冷え込みが厳しく、実りの秋は、早くも冬へと様変わりしていく様相を示している。

「寒いわね……」

哀が呟くと、コナンはそれまでの話をピタリと止めて、

「上空に寒気が流れこんでいるからな。でも、移動性高気圧に覆われて西高東低の気圧配置が進んでいるから、昼頃には少し暖かくなると思うぜ」

哀は、そう、とだけ言つと、首を傾けてコナンを見た。

「それで、今日は何をご馳走してくれるのかしら？」

哀と目が合ったコナンはまた苦笑いして、

「それなら、もうすぐ着くけど……こんな寒い日にぴったりの食べ物だぜ」

程無くして二人がたどり着いたのは、杯戸町にほど近い、車通りの多い道路に面したラーメン屋だった。

建物の外観は真新しいが、構造にどこことなく昔の作りを感じさせる。

「マジで死ぬほどヤバイラーメン、小倉……？」

看板を見上げた哀が片眉をひくつかせた。その後のネーミングセンスが最低ね、という呟きに、コナンは思わずくく、と喉の奥から笑い声を漏らす。

「それでも、昼時は行列ができるほどの人気店なんだぜ」

今の時刻は11時。昼食にしては少し早い気がするが、哀がそれを指摘する前に、コナンが入り口の扉を手で引いた。ガラリと開いた扉の音に合わせて、店の奥からいらっしやい、という威勢のいい声が飛んできた。開店したばかりで客入りの少ない店内。二人が店のカウンター席に座ると、厨房に立つ店長の小倉が水の入ったコップをそれぞれに差し出した。

「おおボウズ！今日は彼女を連れてデートかい」

小倉が訊くと、コナンは小学生らしい無邪気な笑顔で、

「そんなこと言われるとボク困っちゃうよ」

「ハハハ！注文はいつものラーメンかい？」

小倉の言葉に哀はコナンを横目で見たが、コナンはそのまま、

「いつものラーメン二人前で！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364x/>

世界一美味しいラーメンをあなたに（仮）

2011年11月13日01時55分発行